

ザンクト・ガレンのノートカーとドイツ語 —言語ディアスポラとしての修道院—

黒田 享

1. 「母語」で継承する文化

ヨーロッパでは古代ギリシア以来、思想や文芸作品を文字で継承する文化が続いている。特に古いものとしては、紀元前8世紀に活躍したと言われるホメロスの叙事詩の存在を多くの人が知っているだろう。これはホメロスが幼少期から親しんでいた「母語」により生み出されたものだが、もともと口承によって愉しまれていたものが紀元前6世紀になって文字に書き留められたものとされる。つまり、詩人の母語の姿が文字により残されているのである。

しかし、古代ギリシアから時間的・空間的に離れた中世のドイツ語を使う地域では学問や文芸における母語の扱いがかなり異なっていた。本稿では、あまり知られることのない、9世紀から11世紀までのドイツ語を使った文筆活動に光を当て、当時のドイツ語のあり方の一断片を示したい。

2. 「ドイツ語圏」とは何か

さて、ドイツ語が話されるのはドイツという国だけではない。現在の国境に沿って言うと、ドイツの南東にあるオーストリアでもドイツ語が日常的に使われている。また、小国だが、オーストリアと国境を接するリヒテンシュタインの国民もドイツ語を母語として話す。

国民の全てが話さなくともドイツ語の使用が社会的に定着している国もある。ドイツ南西に位置するスイス、そしてベルギーやルクセンブルクがそれにあたる。スイスでは7割の国民の母語がドイツ語で、ドイツ語が社会の中で重要な位置を占める。また、ルクセンブルクでは1984年以来「ルクセンブルク語」が国語と

されているが、文字コミュニケーションではドイツ語の果たす役割が大きいし、ベルギーにもドイツ語を母語とする国民がいて、ドイツ語が公用語の一つになっている。この他、フランス、ポーランド、チェコ、ルーマニア、ハンガリーといった国々にもドイツ語を母語とする人々による大小のコミュニティが存在する。かつてはソビエト連邦の中にもドイツ系市民の自治共和国である「ヴォルガ共和国」があった。これらのように社会の中でドイツ語が土着の住民の母語としてコミュニケーションに用いられる地域を総称して「ドイツ語圏」(図1¹)と呼ぶ²。



【図1】現在の中央ヨーロッパにおけるドイツ語圏主要地域

ドイツ語を母語とする人々の生活圏はヨーロッパの様々な国に跨るわけだ。これはヨーロッパ大陸が地続きの地域であるからこそだろう。

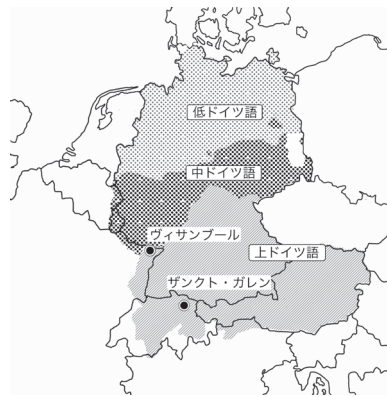
個人の母語を客観的に判定することは難しいが、ドイツ語を母語とする人々の数は総計1億人ほどと言われる。話者は日本語のそれよりもやや少ないが、使われる地域の広がりからは日本語よりもドイツ語の方が規模が大きいと言える。

¹ 本稿に用いる地図類はあくまで位置関係についてのイメージを示すもので、精度は限られている。

² 逆に、ドイツやオーストリアにもドイツ語でない言語（スラブ語やハンガリー語が中心）を母語とする国民がいる。

3. ドイツ語の地域的・歴史的な変異

広い地域で用いられる言語の場合、地域ごとの差異、いわゆる「方言」が生まれることは避けられない。ドイツ語にも方言が存在する。もっとも、同じ内容でも小さな集落ごとに表現が異なることは珍しくないし、地域感情から言語の地域差がことさらに強調されたり、見過ごされたりすることもあり、方言の区分はなかなか難しい。一般的には、ドイツ語には大きく「低ドイツ語」、「中ドイツ語」、「上ドイツ語」という3つの地域変異があるとされる（図2）。低ドイツ語はドイツ語圏の北部、上ドイツ語は南部が使用地域である。中ドイツ語が話されるのは両者の中間の地域だ。「低」や「上」というのは、それぞれのドイツ語の変異が用いられる地域の海拔による。北が「低」で南が「上」なのは、ドイツ語圏では北部の方が南部より海拔が低いからである。



【図2】ドイツ語の地域区分

「中ドイツ語」と「上ドイツ語」を合わせて「高ドイツ語」とする分類も目にすることがある。これはかつて広く採られていた分類法だが、「高」はやはり海拔が高いことを表す。低ドイツ語を「低地ドイツ語」、高ドイツ語を「高地ドイツ語」と呼ぶことがあるのはそのためである。現在の標準ドイツ語は中ドイツ語の性質と上ドイツ語の性質を受け継いでいるので、標準ドイツ語を「高ドイツ語」と呼ぶことも多い。

歴史的な言語差もある。日本語と同じように、ドイツ語も現在の姿で太古から変わらず使われてきたわけではない。一般に、現在の標準ドイツ語との関係から高ドイツ語に焦点をあて、750 年から 1050 年に用いられていた「古高ドイツ語」、1050 年から 1350 年に用いられていた「中高ドイツ語」、1350 年から現在まで使われている「新高ドイツ語」をドイツ語の歴史的段階として区別する（表 1）。ちなみに、この高ドイツ語の時代区分に並行して、低ドイツ語も「古低ドイツ語」—「古サクソン語」と呼ぶこともある—、「中低ドイツ語」、「新低ドイツ語」に区別することができる。「ドイツ語」と言う場合、低ドイツ語と高ドイツ語の両方が含まれるので、その古い形には本来「古ドイツ語」「中ドイツ語」といった名称を与え、低ドイツ語を排除すべきではないだろう。また、新高ドイツ語の時代は 600 年以上にわたるので、現在は 1350 年から 1650 年までのドイツ語を「初期新高ドイツ語」として分ける考え方が主流である。

古高ドイツ語が「古代」のドイツ語でないこと、そして中高ドイツ語が「中世」のドイツ語でないことには注意が必要だ。ヨーロッパ史では一般的に中世は 5 世紀にすでに始まっていた時代と考えられ、「古高ドイツ語」も「中高ドイツ語」も中世のドイツ語なのである。

750 ～ 1050	古高ドイツ語	古低ドイツ語（古サクソン語）
1050 ～ 1350	中高ドイツ語	中低ドイツ語
1350 ～ 現在	(～ 1650 初期新高ドイツ語) 新高ドイツ語	(～ 1650 初期新低ドイツ語) 新低ドイツ語

【表 1】ドイツ語の歴史区分

4. 言語ディアスポラでのドイツ語の伝承

さて、古高ドイツ語の時代は上述のとおり 750 年に始まるのだが、750 年より前にもドイツ語は話されていた。

ドイツ語を英語では German と呼ぶが、これは古代ローマの地名ゲルマニア (Germania) を源とする。ゲルマニアはおおむねライン河周辺から東側、ドナウ河周辺から北側の広い地域だが、ここに住む人々は「ゲルマニア人」ということになる。ドイツ語はゲルマニアの言語であった。

なお、ゲルマニアの言語は言語学で言う「ゲルマン語」に等しいわけではない。ゲルマン語は、ドイツ語、英語、オランダ語、ノルウェー語など一定の共通した性質を持ついくつかの言語をまとめたグループを指す概念である（英語ではこの意味でのゲルマン語は Germanic と呼ぶ）し、古代世界のゲルマニアは現在のフランスやポーランドにあたる地域なども含み、そこで使われる言語はゲルマン語に限られなかった。また、中世初期には、ドイツ語を使う地域は現在よりはるかに限定されており、現在のドイツ東部（特に旧東ドイツにあたる地域）のかなり広範囲がドイツ語圏ではなかった。古高ドイツ語の時代、ドイツ語圏の広がりとは現代とはかなり異なっていたのである。

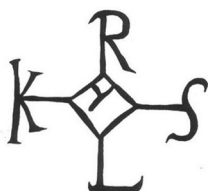
言語として8世紀前半以前のドイツ語の姿をイメージすることは極めて難しい。ドイツ語の姿を伝える史料が現れるのは800年前後になってからのことだからだ。

古高ドイツ語の最初期の姿を知る手がかりとして最も一般的に知られるのは『カール大帝伝』である。8世紀から9世紀へかけての時期、ドイツ語圏はカール大帝（742 - 814）治世下のフランク王国にあった。『カール大帝伝』は大帝の生涯を記した書物で（成立時期は不明だが、カール大帝の没後）、本文はラテン語で書かれるが、その29章で大帝が定めたと言われるドイツ語の月や方角の言い方が紹介されている。現存するドイツ語で書かれた最も古い³文書は『アブロガンス（Abrogans）（8世紀末）』と呼ばれるが、教会生活で使われるラテン語の単語とそれに対応するドイツ語の単語を示す語彙集のようなものだ。ある程度長い文章としては『古高ドイツ語イシドル（Der althochdeutsche Isidor）（800年前後）』が知られる。これはセビリヤの学者イシドルスがラテン語で著した論考『ユダヤ人に対するカトリックの信仰について（De fide catholica contra Iudaeos）』に古高ドイツ語の対訳を付したものである。

これらの9世紀初めの史料がどれもラテン語を主とする文書であることは偶然ではない。この当時のヨーロッパでは、文字を書くのはラテン語によるのが通常だったからだ。文字の読み書きを担っていたのはもっぱらカトリック教会の僧侶

³ 古高ドイツ語の文書の成立年代を正確に突き止めることは難しい。ここでは参考として言及する文書を伝える写本（複数の写本がある場合は最古のもの）の成立年代を挙げる。

たちで、民衆の識字率—文章を読んだり書いたりすることができる人の比率—は低かった。貴族階級も変わらない。カール大帝が自分の名を書けず、署名が必要なときは他人の手によって準備されたモノグラム（図4：K-R-L-Sの文字が十字図と組み合わせられた形になっていた。中心部には菱形があり、全体がO、上半分がA、下半分がUにあたり、全体でK-A-R-O-L-U-Sになるとされる。菱形の中には最後の線としてyが入る）に最後の線のみを書き込んでいたことはよく知られる。



【図3 カール大帝のモノグラム】（Wikipedia.de による）

一方、僧侶には文字の読み書きが欠かせない基本的能力だったため、僧侶養成機関である修道院では文字教育が重要な位置を占めていた。宮廷においても、さまざまな文書が作られることがあったが、そういった場合も、書き手は多くの場合僧侶たち、あるいは僧侶になるための教育を受けた人々であった。「文字」というメディアはごく限られた人々に独占されるものだったのである。

僧侶たちが読み書きに使ったのは教会生活の中心にあったラテン語である。聖書はラテン語のものが用いられていたし、聖職者の間で交わされる書簡や教会内部の文書類もラテン語で書かれた（現在でもカトリック教会はラテン語による文書を発行し続けているし、カトリック教会の総本山と言えるヴァチカン市国では現在でもラテン語は公用語である）。また、学問や文芸活動もラテン語を介して営まれていた。僧侶たちの、信仰に基づく文化空間は言語によっても周囲の社会と隔絶されていたのである。修道院は文字と言語に基づく一種のディアスポラになっていたと言えるだろう。

このような状況では、畢竟ドイツ語の姿を留める史料は残らない。8世紀から

9世紀にかけてのドイツ語がラテン語の文書を通じて、しかもごく限定的にのみ伝わるのはこのためである。ディアスポラがディアスポラ外の文化についての情報を伝える、やや複雑な構造である。

5. 文字によるドイツ語文芸の始まり

カール大帝はキリスト教の振興に努めた為政者だったが、同時に非キリスト教文化に対して寛容だったとも言われる。先に触れた『カール大帝伝』29章では、大帝が古くからの詩歌を記録させたことも記されている。これは『ヒルデブランの歌（940年代）』（キリスト教化以前から民衆の間に定着していた非キリスト教的口承文芸作品の一部とみなすことができる）のようなものであったと考えられる。もっとも、詩歌では『ヴェッソプルの祈り（814年前後）』『ムスピリ（9世紀後半）』『ルートヴィヒの歌（9世紀前半）』などキリスト教的世界観を背景とするものも多い。

9世紀中盤に書かれたものとしてはラテン語、当時のフランス語とドイツ語（古高ドイツ語）による『ストラスブールの誓文』（842年に西フランク王シャルル禿王と東フランク王ルートヴィヒドイツ王の間で結ばれた同盟を伝える文書）のような、社会との関わりが深いドイツ語文書もあるが、この頃になるとかなりの長さの、物語性を持つ文書が現れ始める。比較的早いものとしては、ラテン語とドイツ語の対訳による、シリア人タチアヌス編纂のキリスト物語（『タツィアーン（830年前後）』）がある。

ドイツ語によって書かれた最古の脚韻詩としてよく知られる『福音書（860年代前後）』は内容的に『タツィアーン』に近い。『福音書』は対訳を含まない、一貫してドイツ語で書かれたもの（章題などはラテン語が使われている）で、現在のフランス・アルザス地方ヴィサンブール（図2参照）に生きたオトフリートという名の修道僧によって書かれたものである。オトフリートは、当時のドイツ語圏で最も権威があったフルダ修道院でフラバヌス・マウルス（当時、「ドイツ最高の教師（Praeceptor Germaniae）」と呼ばれた）の教えを受け、ヴィサンブール修道院でも重要な地位にあった。『福音書』は聖書に含まれる4つの福音書で伝えられるイエス・キリストの生涯をドイツ語で描いたもので、7000詩行を超

える大作であるだけでなく、脚韻以外にも様々な詩作技法が試みられた叙事詩である。

古高ドイツ語で書かれた文書の場合、その書き手がわかることは少ないが、オトフリートはその名だけでなく、人となりまでもかなり詳細にわかる稀な人物である。オトフリート自身の記すところによれば、彼の企てはドイツ語がラテン語やギリシア語といった古典語に比肩するものとして扱われないことへの嘆き（この嘆きはまた、オトフリートの周囲の人々にも共有されていた）に発する。

『福音書』は数少ない古高ドイツ語文芸作品の中でも、文学者の息吹を直接的に感じることができる重要な作品である。ドイツ文学史だけでなく、世界文学史の上でももっと注目されているだろう。だが、修道士オトフリートと『福音書』についてはすでに述べている（Kuroda 2016、黒田 2020）ので、詳しくはそちらに譲りたい。

6. ザンクト・ガレンの僧ノートカー

本稿ではオトフリートと同じように古高ドイツ語の書き手として名が残っている人物、ザンクト・ガレンの修道僧ノートカーを紹介しよう。ノートカーは949年か950年に生まれ、1022年に没したとされる（Hellgardt 1979: 181）、古高ドイツ語時代の最末期にあたる時代に生きた人物である。

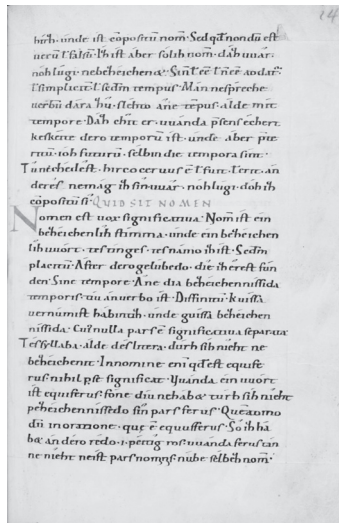
ザンクト・ガレン（「サンガレン」と報道されるのもよく目にする）は、スイスの街である。上述のようにスイスはドイツ語が使われる国々の一つだが、ドイツ語に並んでフランス語、イタリア語、レトロマン語も国語とする多言語国家である。ザンクト・ガレンはドイツ語が用いられる地域（つまりドイツ語圏）に位置するが（図2参照）、その地名は、ここを終の住処としたアイルランド出身の宣教師聖ガルスの名から取られている。この街の礎になったのは聖ガルスの没後に作られた修道院である。中でもその図書館は壮麗なもので、世界文化遺産として登録されている。蔵書にはヨーロッパ文化史上重要な文書も多い（ユネスコの「世界の記憶」である）。

ザンクト・ガレン修道院はオトフリートが活動していたヴィサンブール修道院と結びつきが強かった。『福音書』にも、ザンクト・ガレンの僧侶ヴェリンベル

トとハルトムアトに宛てた献辞があり（ハルトムアトは872年から883年にザンクト・ガレン修道院院長を務める）、オトフリートとザンクト・ガレンの僧侶たちの間に何らかの交流があったことを想像させる（Haubrichs 1973: 60 参照）。とは言え、オトフリートは800年前後に生まれ、最も活躍したのは850年から870年にかけてであると言われる（Kleiber 1971 参照）。ノートカーとオトフリートが生きた時代にはおよそ150年の隔たりがあるわけだ。実際に、ノートカーの活動には、オトフリートの影響を感じさせるものはない。

7. ノートカーの翻訳

ドイツ語で文章を綴ることについての意識の点でも、ノートカーとオトフリートの立場は異なる。基本的にドイツ語が単独で使われる『福音書』とは違い、ノートカーの残したドイツ語文章はどれもラテン語文章との対訳である（ラテン語のみによる著作もある）。



【図4】 ノートカーによる『命題論』訳の写本（St. Gallen, Stiftsbibliothek, Cod. Sang. 818, f.147, www.e-codices.ch による）。本文で紹介されている箇所は12行より。

具体例をみてみよう。ノートカーの残したドイツ語文章としてよく知られてい

るのはアリストテレスの著作の古高ドイツ語への翻訳である。アリストテレスの著作はもともとギリシア語によるが、中世ヨーロッパではボエティウスによるラテン語訳が広く読まれていた。ノートカーが翻訳の基としたのもこのラテン語訳である。下に挙げるのは『オルガノン』に含まれる『命題論』の一部、「第1書(Liber primus)」とされる「名詞とは何か (QUID SIT NOMEN)」と題された部分の冒頭である (図5)⁴。

Nomen est uox significatiua.

名詞とは、意味を持つ声である。

Secundum placitum.

見解に従い

Sine tempore.

時間なく

Diffinitum.

定められたもの。

Cuius nulla pars est significatiua separata.

その部分には独立した意味はない。

In nomine enim quod est equiferus . nihil per se significat.

なぜなら equiferus という語の内部には、単独で何かを表現するような部分はないからだ。

Nomen íst éin bezéichenlīh stímma . únde éin bezéichenlīh uuórt . tēs tīnges . tēs námo iz íst.

名詞とは意味を持つ声であり、物を表現する語であり、その名である。

Áfter déro gelúbeto . díe iz êrest fúnden.

それを始めに見出した人々の合意に沿い

Âne dia bezéichennissida temporis . tíu án uerbo íst.

動詞に伴う時間の意味を伴わず

Kuísza uernúmist hábintiz . únde guísza bezéichennissida.

特定の内容と特定の意味を有するものである。

Tēs syllaba . álde dés litera . dúrh síh nieht ne-bezéichenit.

その音や文字自体は何も意味を表さない。

Uuánda éin uuórt íst equiferus . fóne díu nehábet túrh síh nieht pezéichennissedo sín pars ferus.

なぜなら equiferus は、その一部 ferus それ自体では意味を持たない一つの語であるから。

ノートカーによる翻訳文はラテン語文の内容に沿ってはいるが、ラテン語原文と比べると、より多くの言葉を費やし、ずっと説明的である。例えば、上の例の

⁴ James C. King (編) *Nothker der Deutsche, Boethius' Bearbeitung von Aristoteles' Schrift »De Interpretatione«*. Tübingen 1975. p.7 による。ここではラテン語原文と古高ドイツ語翻訳文それぞれの日本語訳も載せるが、原文の表現構造がある程度つかめるよう、逐語訳に近い翻訳方法を採用した。あえて断片的に訳した部分もある。

最後の部分では equiferus（野生の馬）という単語が単一の要素から成り立つ、それ自体として不可分のものであり、分割しても意味をなさないことが論じられている。ラテン語原文がこのことを短いことばで述べるだけなのに対し、古高ドイツ語では意味をなさない要素の例としてわざわざ「ferus」（equiferusの一部）を示し、equiferus がそれ以上細分化できないことをより直接的に説明している。他にもラテン語の表現をパラフレーズし、言葉を付け加えることで内容を捉えやすくしている箇所が多くあり、ノートカーのドイツ語文は純粋な翻訳文というよりも、原文内容の理解を助けるための文章だったと言えるだろう。

8. ノートカーの手紙

こうしたノートカーの翻訳スタイルにはどのような背景があるのだろうか。『福音書』にそれを世に送り出すにあたっての思いを吐露する献呈文や書簡を添えたオトフリートとは異なり、ノートカーによるそうした付帯文書は残っていない（むしろそれが、当時のヨーロッパの文字文化では普通のことだった）。そのような中で、ノートカーが1019年か1020年に書いたと言われる（Hellgardt 1979: 182）シオン司教フーゴー宛の書簡⁵は、ノートカーの翻訳についての考え方やその背景に迫る資料になる。

この書簡は、まず挨拶から始まる。その後、詳しくはわからないが、先立って伝えられていた司教の何らかの意見に対するノートカーの返答が続く。ノートカーの翻訳姿勢を理解するために重要になるのはその後の部分である。

司教様が私に取り組むことを望まれている学問は断念しました。私はむしろ手段としてそれには取り組まねばならないのです。というのも、宗教書、特に教育の場で読まなければならないものは、学問を味わうことなく完全な理解に達することができないのです。私たちの弟子達にはそうした書物に触れて欲しいと思い、私はこれまでほぼ聞かれたことがないことを試みました。それは、ラテン語の文書を私たちの言葉へ翻訳し、アリストテ

⁵ James C. King / Petrus W. Tax（編）*Notker der Deutsche, Die kleineren Schriften*. Tübingen 1996. p. 348-349 による。

レスやキケロ、その他の学者たちが述べたことを三段論法や比喩、弁証法を用いて表した内容を明らかにする試みです。

ノートカーの翻訳活動は、彼の教育方針に出発点があるようだ。ここにはノートカーが教え子である修道士たちに古典的素養を背景とした教育をしようとしていることが表れている。ノートカーは修道士たちに学ばせるものとしてまず、前節の例でもあったアリストテレスなどを挙げる。本稿では割愛するが、この後、ノートカーが翻訳に取り組んだ文芸書、学術書や宗教書などが列挙されていく。そこには、聖書の一部（詩篇、ヨブ記）などもあるとはいえ、古典的な哲学書・文学書が並ぶ（もっとも、その多くについては翻訳が残っておらず、実際に翻訳がされたかは定かではない）。

ラテン語のドイツ語への翻訳という企てが奇異に映ることを認めつつも、なぜノートカーがそれを必要なものと見なすのかはこの後の箇所で明かされる。

このうちのいずれかが司教様のお手元にお届けできるほどの出来映えに達しているかはわかりません。ですが、お望みであれば、費用もかかりますので、何枚かの羊皮紙と筆記者への謝金をお送りください。司教様の写本をお送りします。お手元に届きましたら、私自身がそこにいるようにお考えください。もっとも、まずは見慣れぬ物を前にしたときのように不快な気持ちになられることでしょう。それでも、やがてだんだんと受け入れていただけたと思います。そしてお読みくださり、自分のことばによらなければほとんど、あるいは完全ではない形でしか捉えることのできないことでも、母語では確かにに理解できるとお気づきくださることでしょう。

書簡はこの後、ドイツ語を文字化する際の工夫を具体例にもとづいて説明した後、結びの挨拶をもって終わるが、ここに挙げた箇所の最後の一文がこの書簡では最も重要だろう。ノートカーの翻訳が単なる言語の置き換えではなく、内容理解の助けとなる性格を持っていたことはすでに7節で指摘した。翻訳が原典テキストの内容をどの程度正確に伝えるかは今日でもしばしば議論されることだが、

翻訳が母語でない言語で書かれたテキストの内容を理解する支えになることは疑いない。ノートカーはそのことを強く意識し、翻訳を教育に活用しようと考えていたのではないか。このアプローチについてノートカーがかなり自信をもっていたことが彼のことばのはしばしから伝わってくる。ノートカーにとって、翻訳は大きな意気込みをもって取り組むに値する革新的教育手段だったのだろう。

9. 結び

ヴィサンブルのオトフリートがドイツ語を詩作に使ったのは、ドイツ語の文化的位置づけをラテン語やギリシア語に並ぶものにしたいとする思いからだった。この姿勢は、社会情勢（『福音書』が生まれたのはフランク王国が分裂し、ドイツ語を話す民族が一つの国として力をつけていく時代だった）の影響によるところがあるように思える（実際、『福音書』は為政者ドイツ王ルートヴィヒを讃える詩で始まる）。オトフリートとは異なり、ノートカーは政治の世界とは縁遠い、知の世界をより大事にした生活を送っていたのだろう。しかしノートカーが残した翻訳の量は膨大で、『福音書』の執筆に劣らない偉業と見なせる。フーゴー司教宛書簡からは、翻訳活動の背景には弟子に優れた教育を施そうとする強い思いがあったことが読み取れるし、ノートカーもオトフリートと同じように修道院内部では重要な役割を担っていた。オトフリート同様、ノートカーも高い学識を備え、熱意をもってドイツ語に対峙した人物だったことだろう。

ドイツ語と、それを話す人の関わりの歴史に思いを馳せる際、ザンクト・ガレンの僧ノートカーは重要な人物である。読者の中から関心を持つ人が現れば本稿の筆者にとって喜びである。

参考文献

- Haubrichs, Wolfgang (1973) „Otfrids St. Galler „Studienfreunde““. *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik* 4. p. 49-112.
- Hellgardt, Ernst (1979) „Notkers des Deutschen Brief an Bischof Hugo von Sitten“. Klaus Grubmüller, Ernst Hellgardt, Heinrich Jellissen, Marga Reis (編) *Befund und Deutung. Zum Verhältnis von Empirie und Interpretation*

in Sprach- und Literaturwissenschaft. Festschrift für Hans Fromm.

Tübingen: Niemeyer. p. 169-192.

Kleiber, Wolfgang (1971) *Otfrid von Weißenburg*. Bern/München: Francke.

Kuroda, Susumu (2016) „Otfrid von Weißenburg“. In Carmen Bluhm, Jens Hopperdietzel, Lars Erik Zeige (編) *Glossarium amicorum*. Berlin: Institut für deutsche Sprache und Linguistik. p. 163-168.

黒田 享 (2020) 「愛郷者オトフリートー theodiscus と frenkisg」井出 万秀・川島 隆 (編) 『ドイツ語と向き合う』東京: ひつじ書房. p. 125-145.

(本稿は JSPS 科研費 18K00550 の助成を受けた研究に基づいている。)